

# みだれ髪

与謝野晶子

青空文庫





この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり表紙  
画みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢  
の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり

## 臙脂紫

夜の帳ちやうにささめき尽きし星の今を下界げかいの人の鬢むすのほつれよ

歌にきけな誰れ野の花に紅いき否いなむおもむきあるかな春罪はるみもつ子

髪かみ五尺ときなば水にやはらかき少女をとめごころは秘めて放たじ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃いろもいに見る

その子はたち二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

堂の鐘のひくきゆふべを前髪まへかみの桃のつぼみにきやう経たまへ君

紫にもみうらにほふみだれ篋ばこをかくしわづらふ宵の春の神

臙脂色えんじいろは誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命いのち

紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子眉毛かほそき

紺こんじやう青を絹にわが泣く春の暮やまぶきがさね友歌ねびぬ

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき

海棠にえうなくときし紅すてて夕雨みやる瞳よたゆき

水にねし嵯峨の大堰のひと夜神紹蚊帳の裾の歌ひめたまへ

春の国恋の御国のあさぼらけしるきは髪か梅花のあぶら

今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾みすそさはりてわが髪ぬれぬ

細きわがうなじにあまる御手みてのべてささへたまへな帰る夜の神

清水きよみづへ祇園ぎをんをよぎる桜月夜さくらづきよこよひ逢ふ人みなうつくしき

秋の神の御衣みけしより曳く白き虹ものおもふ子の額に消えぬ

経きやうはにがし春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ



山ごもりかくてあれなのみをしへよ紅べにつくるころ桃の花さかむ

とき髪に室むろむつまじの百合のかをり消えをあやぶむ夜よの淡紅ときいろ色よ

雲ぞ青き来し夏なつひめ姫が朝の髪うつくしいかな水に流るる

夜の神の朝のり帰る羊とらへちさき枕のしたにかくさむ

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづうみあまりさびしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

許したまへあらずばこそ今のわが身うすむらさきの酒うつくし  
き

わすれがたきとのみに趣味しゆみをみとめませ説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴をごとにもたす乱れ乱れ髪

たまくらに鬢びんのひとすぢきれし音ねを小琴をごとと聞きし春の夜の夢

春雨にぬれて君こし草の門かどよおもはれ顔の海棠の夕

小草をぐさいひぬ 『酔へる涙の色にさかむそれまで斯くて覚めざれな少を女とめ』

牧場いでて南にはしる水ながしきても緑の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜よの舞まひ殿どのらならぶ子つらよ束つかの間ま老いな

雨みゆるうき葉しら蓮はす絵師の君に傘はすまるらする三尺の船

御相みさういとどしたしみやすきなつかしき若葉わかば木立だちの中なかの盧遮那るしやなぶつ仏

さて責むな高きにのぼり君みずや紅あけの涙の永劫えいごふのあと

春雨にゆふべの宮みやをまよひ出でし小羊こひつじきみ君をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合さゆり花なはたち二十の夏をうつくしと見ぬ

みだれごこちまどひごこちぞ頻なる百合ちふむ神に乳ちおほひあへず

くれなるの薔薇ばらのかさねの唇に靈の香のなき歌のせますな

旅のやど水に端居はしゐの僧の君をいみじと泣きぬ夏の夜の月

春の夜の闇やみの中なかくるあまき風しばしかの子が髪に吹かざれ

水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや君

誰ゆふべぞ夕いこまひがし生駒の山の上のまよひの雲にこの子うらなへ

悔つるぎいますなおもひおさへし袖に折れし剣とげつひの理想の花に刺とげあらじ

額ぬかごしに暁あけの月みる加茂川の浅水あさみづ色いろのみだれ藻染もぞめよ

みそで  
御袖くくりかへりますかの薄闇うすやみの欄おぼしま干夏おぼしまの加茂川の神

なほ許せ御国遠くば夜よの御神紅みかみべにざらふね盃船ふねに送りまゐらせむ

狂ひの子われに焰ほのほの翅はねかろき百三十里あわただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ闇やみをおそれぬめしひに似たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひのそれは果してし今

わかき小指をゆびごていふん胡紛をとくにまどひあり夕ぐれ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に歌へな山の鶯

ふしませとその間まさがりし春の宵衣いかう桁にかけし御袖かづきぬ

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす

しのび足に君を追ひゆく薄月うすづつきよ夜右のたもとの文がらおもき

紫に小草をぐさが上へ影おちぬ野の春かぜに髪けづる朝

絵日傘をかなたの岸の草になげわたる小川よ春の水ぬるき

しら壁へ歌ひとつ染めむねがひにて笠はあらざりき二百里の旅

嵯峨の君を歌に仮せなの朝のすさびすねし鏡のわが夏姿

ふさひ知らぬ新にひびと婦かざすしら萩に今宵の神のそと片かたゑ笑みし

ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれかりそめのかりそめの別れ



鶯は君が夢よともどきながら緑のとばりそとかかげ見る

紫の紅の滴り花におちて成りしかひなの夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき

紫の理想の雲はちぎれく仰ぐわが空それはた消えぬ

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここのなる花の紅ぞ濃き

神の背にひろきなめをねがはずや今かたかたの袖こむらさき

とや心朝をごとの小琴の四つの緒のひとつを永久とほに神きりすてし

ひく袖かたゑみに片笑もらす春ぞわかき朝のうしほの恋のたはぶれ

くれの春隣すむ画師ゑしうつくしき今朝山吹けさに声わかかりし

郷人さとびとにとなり邸やしきのしら藤の花はとのみに問ひもかねたる

人にそひて櫛しきみささぐるこもり妻母つまなる君を御墓みはかに泣きぬ

なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな

おぼしまにおもひはてなき身をもたせ小萩をわたる秋の風見る

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるるはつらき人の世のきぬ

売りし琴にむつびの曲をきよくのせしひびき逢魔あふまがどきの黒百合折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて蛍よかぜながるる夜風の青き

恋ならぬねぎめたたずむ野のひろさ名なし小川のうつくしき夏

このおもひ何とならむのまどひもちしその昨日きのふすらさびしかりし  
我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜よるを蝶のねにこし

その涙のごふえにしは持たざりきさびしの水に見し二十日はつかづき月

水十里ゆふべの船をあだにやりて柳による子ぬかうつくしき（を  
とめ）

旅の身のおほかは大河ひとつまどはむや徐しづかに日記にきの里の名けしぬ（旅  
びと）

をかき小傘とりて朝の水くみ我とこそ穂麦ほむぎあをあをこさめ小雨ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母が小窓こまど小雨こさめのなかに山吹のちる

恋か血か牡丹に尽きし春のおもひとのみの宵のひとり歌なき

長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻おとととなる身の我れぬけ出でし

春三月柱みつきちおかぬ琴に音たてぬふれしそぞろの宵の乱れ髪

いづこまで君は帰るとゆふべ野にわが袖ひきぬはね翅ある童わらは

ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌『うき里去りて往きて帰らじ』

さびしさに百二十里をそぞろ来ぬと云ふ人あらばあらば如何なら  
む

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくろ美しと見ば人にとぶらへ

今の我に歌のありやを問ひますな柱ちなき織ほそいと絃げんこれ二十五げん

神のさだめ命のひびき終つひの我世琴ことに斧をのうつ音ききたまへ

人ふたり無才ぶさいの二字を歌に笑みぬ恋こひ二万ねん年ながき短き

## 蓮の花船

漕ぎかへる夕ゆふぶね船おそき僧の君紅蓮ぐれんや多きしら蓮はすや多き

あづまやに水のおときく藤の夕はづしますなのひくき枕よ

御袖ならず御髪みぐしのたけときこえたり七尺いづれしら藤の花

夏花のすがたは細きくれなるに真昼まひるいきむの恋よこの子よ



肩おちて経きやうにゆらぎのそぞろ髪をとめうしんじや有心者春の雲こき

とき髪を若枝わかえにからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹

うながされて汀みぎはの闇やみに車おりぬほの紫そりはしの反橋ふぢの藤

われとなく梭をさの手とめし門かどの唄うた姉あねがゑまひの底はづかしき

ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし昨日きのふの無きにしもあらず

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと云ひてかかへてにげぬ

ひとつ篋はこにひひなをさめて蓋ふたとちて何となき息桃いきにはばかる

ほの見しは奈良のはづれの若葉宿わかばやどうすまゆずみのなつかしかり  
し

紅あけに名の知らぬ花さく野の小道こみちいそぎたまふな小傘をかさの一人ひとり

くだり船ふね昨夜よべ月かげに歌そめし御堂みだうの壁も見えず見えずなりぬ

師の君の目を病みませる庵いほの庭へうつしまるらす白菊の花

文字ほそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉たまむし虫ひめし小篁こばこの蓋ふたに

ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうとの爪つまさき先ぬらす海棠の雨

ゆく春をえらびよしある絹きぬ袷あはせ衣ねびのよそめを一人ひとりに問ひぬ

ぬしいはずとれなの筆の水の夕そよ墨足らぬ撫なで子しこがさね

母よびてあかつき問ひし君といはれそむくる片頬柳にふれぬ

のろひ歌かきかさねたる反古ほごとりて黒き胡蝶をおさへぬるかな

額ぬかしろき聖よ見ずや夕ぐれを海棠に立つ春夢はるゆめみすがた見姿

笛の音に法華経うつす手をとどめひそめし眉よまだうらわかき

白びやくだん檀なのけむりこなたへ絶えずあふるにくき扇をうばひぬるか

母なるが枕まくらぎやう経なよむかたはらのちひさき足をうつくしと見き

わが歌に瞳ひとみのいろをうるませしその君去りて十日たちにけり

かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやふくなりにはけるかな

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜よべの泊とまりの唄うたねたましき

泣かで急げやは手にはばき解くえにしえにし持つ子の夕を待たむ

燕なく朝をはばきの紐ひもぞゆるき柳かすむやその家やのめぐり

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿を泣く子朝見しあさみ

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき

道たま〜蓮月が庵のあとに出でぬ梅に相行く西の京の山

君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな

あるときはねたしと見たる友の髪に香の煙のはひかかるかな

わが春のはたちすがた二十姿と打ぞ見ぬ底くれなるのうす色牡丹

春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔の木蓮や花

さはいへど君が昨日きのふの恋がたりひだり枕の切なき夜半よ

人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌か芙蓉といふ文字

琴の上に梅の実おつる宿の昼よちかき清水に歌ずする君

うたたねの君がかたへの旅づつみ恋の詩集の古きあたらしき

戸に倚りて菖蒲あやめう売る子がひたひ髪にかかる薄霽うすもやにほひある朝

五月さみだれ雨もむかしに遠き山の庵つや通夜する人に卯の花いけぬ

四十八寺じそのひと寺てらの鐘なりぬ今し江の北あまぐも雨雲ひくき

人の子にかせしは罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき

ふりかへり許したまへの袖だたみやみ闇くる風に春ときめきぬ

夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とりたまへ



巖いはをはなれ谿たにをくだりて躑躅つゞじをりて都の絵師と水に別れぬ

春の日を恋に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅の子藤たそがるる

油あぶらのあと島田のかたと今日けふ知りし壁すもゝに李の花ちりかかる

うなじ手にひくきささやき藤の朝をよしなやこの子行くは旅の君

まどひなくて経ずする我と見たまふか下品げぼんの仏ほとけ上品うぼんの仏ほとけ

ながしつる四つの笹舟さくぶね紅梅を載せしがことにおくれて往きぬ

奥の室まのうらめづらしき初うぶごゑ声こゑに血の気のぼりし面おもまだ若き

人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめたき秋の雨かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ

かしこしといなみにいひて我とこそその山坂を御手に倚らざりし

鳥辺野は御親の御墓あるところ清水坂きよみづざかに歌はなかりき

御親まつる墓のしら梅中なかに白く熊笹くまざさ小笹をささたそがれそめぬ

男をとこきよし載するに僧のうらわかき月にくらしの蓮はすの花はな船ぶね

経にわかき僧のみこゑの片かた明あかり月の蓮はす船ぶね兄あにこぎかへる

浮葉きるとぬれし袂あけの紅あけのしづく蓮はすにそそぎてなさけ教へむ

こころみにわかき唇ふれて見れば冷かなるよしら蓮の露

明くる夜の河はばひろき嵯峨の欄らんきぬ水色の二人ふたりの夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら濡ひぢぬうすものの袖

牛の子を木かげに立たせ絵にうつす君がゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇こぞで去年までは白きをめでし君にやはあらぬ

おもぎしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の神かみ  
々、

五月雨に築土ついでちくづれし鳥羽殿とばどののいぬるの池におもだかさきぬ

つばくらの羽はねにしたたる春雨をうけてなでむかわが朝寝髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間みしつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひかばあたへむ三尺の袖

春かぜに桜花ちる層塔そうたふのゆふべを鳩の羽はに歌そめむ

憎からぬねたみもつ子とききし子の垣の山吹歌うて過ぎぬ

おばしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を西へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににほひ高き朝をつつみし練ねりの下したががささねね襲

## 白百合

月の夜の蓮はすのおばしま君うつくしうら葉の御歌みうたわすれはせずよ

たけの髪をとめふたり二人に月うすき今宵しら蓮色はすまどはずや

荷葉はすなかば誰にゆるすのかみ上の御句みくぞ御袖片みそでかたと取るわかき師の君

おもひおもふ今のこころに分ち分かず君やしら萩われやしる百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手はなちしは昨日きのふの夕

三たりをば世にうらぶれしはらからとわれ先づ云ひぬ西の京の宿

今宵こよひまくら神にゆづらぬやは手なりたがはせまさじ白百合の夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合の露の歌ささやきぬ

次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋の夜いかに長きみぢかき

友のあしのつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なくいひぬ



ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと夢みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりその日は六日二人と一人  
ふたり ひとり

もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりきうつくしの友西の京の秋

星となりて逢はむそれまで思ひ出でな一つふすまに聞きし秋の声

人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日けふ秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔にも鬼にも勝<sup>か</sup>たむと云へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾ひてだかむ神のこころか

しろ百合はそれその人の高きおもひおもわは艶<sup>にほ</sup>ふ紅芙蓉<sup>べにふよう</sup>とこそ

さはいへどそのひと時よまばゆかりき夏の野しめし白百合の花

友は二十<sup>はたち</sup>ふたつこしたる我身なりふさはずあらじ恋と伝へむ

その血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春を山<sup>やまたで</sup>蓼たづねますな君

秋を三人みたり権の実なげし鯉やいづこ池の朝かぜ手と手つめたき

かの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲なきか西の京の山

ひと花はみづから溪にもとめきませ若狭の雪に堪へむくれなる紅

『筆のあとに山居やまゐのさまを知りたまへ』人への人の文さりげなき

京はものつらきところと書きさして見おろしませる加茂の河し  
ろき

恨みまつる湯におりしまの一人居ひとりゐを歌なかりきの君へだてあり

秋ふすまの衾あしたわびし身うらめしきつめたきためし春の京に得ぬ

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき御肩みかたに春の日よわき

京の鐘この日このとき我れあらずこの日このとき人と人を泣きぬ

琵琶の海山ごえ行かむいざと云ひし秋よ三人みたりよ人そぞろなりし

京の水の深み見おろし秋を人の裂きし小指をゆびの血のあと寒き

山蓼のそれよりふかきくれなるは梅よはばかれ神にとがおはむ

魔のまへに理想おもひくだきしよわき子と友のゆふべをゆびさしますな

魔のわぎを神のさだめと眼を閉ぢし友の片手の花あやぶみぬ

歌をかぞへその子この子にならふなのまだ寸すんならぬ白百合の芽よ

## はたち妻

露にさめて瞳ひとみもたぐる野の色よ夢のただちの紫の虹

やれ壁にチチアンが名はつらかりき湧く酒がめを夕に秘めな

何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびきさとし聖せい歌かのほひ

神にそむきふたたびここに君と見ぬ別れの別れさいへ乱れじ

淵の水になげし聖書を又もひろひ空<sup>そら</sup>仰ぎ泣くわれまどひの子

聖書だく子人の御親<sup>みおや</sup>の墓に伏して弥勒<sup>みろく</sup>の名をば夕に喚びぬ

神ここに力をわびぬとき紅<sup>べに</sup>のほひ興<sup>きよう</sup>がるめしひの少女<sup>をとめ</sup>

瘦せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を泣く子と神よ見ますな

おもはずや夢ねがはずや若<sup>わか</sup>人<sup>かうど</sup>よもゆるくちびる君に映<sup>うつ</sup>らずや

君さらば巫山ふぎの春のひと夜妻よづままたの世までは忘れゐたまへ

あまきにかき味うたがひぬ我を見てわかきひじりの流しにし涙

歌に名は相問あひとはざりきさいへ一夜ひとよゑにしのほかの一夜とおぼすな

水の香をきぬにおほひぬわかき神草には見えぬ風のゆるぎよ

ゆく水のざれ言きかす神の笑まひ御齒みはあざやかに花の夜あけぬ

百合にやる天あめの小蝶のみづいろの翅はねにしつけの糸をとる神



ひとつ血の胸くれなるの春のいのちひれふすかをり神もとめよる

わがいだくおもかげ君はそこに見む春のゆふべの黄雲きぐものちぎれ

むねの清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子我も罪の子

うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふれて経くづれきぬ

今日けふを知らず智慧の小石は問はでありき星のおきてと別れにし朝

春にがき貝多羅葉ばいたらえふの名をききて堂の夕日に友の世泣きぬ

ふた月を歌にただある三本樹ほんぎ加茂川千鳥恋はなき子ぞ

わかき子が乳ちくの香まじる春雨うはばに上羽うはばを染めむ白き鳩われ

夕ぐれを花にかくるる小狐のこ毛けにひびく北嵯峨の鐘

見しはそれ緑の夢のほそき夢ゆるせ旅人かたり草なき

胸と胸とおもひことなる松のかぜ友の頬を吹きぬ我頬を吹きぬ

野茨のぼらをりて髪にもかざし手にもとり永き日野辺に君まちわびぬ

春を説くなその朝かぜにほころびし袂だく子に君こころなき

春をおなじ急瀬はやせさばしる若鮎つりをの釣緒をの細緒くれなるならぬ

みなぞこにけぶる黒髪ぬしや誰れ緋鯉のせなに梅の花ちる

秋を人のよりし柱にとがめあり梅にことかるきぬぎぬの歌

京の山のこぞめしら梅人ふたりおなじ夢みし春と知りたまへ

なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸によりて人まちし闇

詞にも歌にもなさじわがおもひその日そのとき胸より胸に

歌にねて昨夜よべ梶の葉の作者見ぬうつくしかりき黒髪の色

下しもぎやう京べにやや紅屋が門かどをくぐりたる男かはゆし春の夜の月

枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子われより笑みうつくしき

しら梅は袖に湯の香は下のきぬにかりそめながら君さらばさらば

二十とせの我世の幸はうすかりきせめて今見る夢やすかれな

二十とせのうすきいのちのひびきありと浪華の夏の歌に泣きし君

かづくきぬにその間の床の梅ぞにくき昔がたりを夢に寄する君

それ終に夢にはあらぬそら語り中<sup>なか</sup>のともしびいつ君きえし

君ゆくとその夕ぐれに二人して柱にそめし白萩の歌

なさけあせし文みて病みておとろへてかくても人を猶恋ひわたる

夜の神のあともとめよるしら綾の鬢の香朝の春雨の宿

その子ここに夕片笑みの二十はたちびと虹のはしらを説くに隠れぬ

このあした君があげたるみどり子のやがて得む恋うつくしかれな

恋の神にむくいまつりし今日の歌えにしの神はいつ受けまさむ

かくてなほあくがれますか真善美わが手の花はくれなるよ君

くろ髪かみの千すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる

そよ理想りやうおもひにうすき身なればか朝あさの露つゆ草人ねたかりし

とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれし牡丹さぎぬに紅べにき

『あらざりき』そは後のちの人のつぶやきし我われには永久とほのうつくしの

夢

行く春の一絃ひとをひとぢ一柱におもひありさいへ火かげのわが髪ながき

のらす神あふぎ見するにまぶた瞼おもきわが世の闇の夢の小夜中さよなか

そのわかき羊は誰に似たるぞの瞳ひとみの御色野は夕なりしみいろ

あえかなる白きうすものまなじりの火かげの栄はえの詛のろはしき君

紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の尼すむ寺は訪はざりし



くさぐさの色ある花によそはれし棺ひつぎのなかの友うつくしき

五つとせは夢にあらずよみそなはせ春に色なき草ながき里

すげ笠にあるべき歌と強ひゆきぬ若葉よ薫かをれ生駒いこま葛かつらぎ城

裾たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の真昼まひるしづけき

紫のわが世の恋のあさぼらけ諸手もろでのかをり追風おひかぜながき

このおもひ真昼の夢と誰か云ふ酒のかをりのなつかしき春

みどりなるは学びの宮とさす神にいらへまつらで摘む夕すみれ

そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂<sup>くる</sup>ほしき汝<sup>なれ</sup>よ小琴<sup>をごと</sup>よ片袖かさむ（琴に）

ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴とおぼせ眉やはき君（琴  
のいらへて）

去年<sup>こそ</sup>ゆきし姉の名よびて夕ぐれの戸に立つ人をあはれと思ひぬ

つづ  
十九のわれすでに董を白く見し水はやつれぬはかなかるべき

ひと年をこの子のすがた絹に成らず画の筆すてて詩にかへし君

白きちりぬ紅きくづれぬ床ゆかの牡丹五山ごさんの僧の口おそろしき

今日の身に我をさそひし中なかの姉小町こまちのはてを祈れと去いにぬ

秋もろし春みじかしをまどひなく説く子ありなば我れ道きかむ

さそひ入れてさらばと我手はらひます御衣みけしのにはひ闇やみやはらかき

病みてこもる山の御堂に春くれぬ今日けふ文ながき絵筆とる君

河ぞひの門かど小雨ふる柳はら二人ふたりの一人ひとりめす馬しろき

歌は斯くよ血ぞゆらぎしと語る友に笑まひを見せしきびしき思

とおもへばぞ垣をこえたる山ひつじとおもへばその花よわりなの

庭下駄に水をあやぶむ花あやめはさみ鋏にたらぬ力をわびぬ

柳ぬれし今朝けさかど門すぐる文づかひ青あをがひ貝ずりのその箱ほそき

『いまさらにそは春せまき御胸なり』われ眼をとどて御手にすがりぬ

その友はもだえのはてに歌を見ぬわれを召す神きぬ薄黒き

そのなさけかけますな君罪の子が狂ひのはてを見むと云ひたまへ

いさめますか道ときますかさとしますか宿世のよそに血を召しませな

もろかりしはかなかりしと春のうた焚くにこの子の血ぞあまり若  
 き

夏やせの我やねたみの二十妻はたちづま里居さとゐの夏に京を説く君

こもり居しむに集しむの歌ぬくねたみ妻さつき五月のやどの二人ふたりうつくしき

## 舞姫

人に侍る大堰おほみの水のおばしまにわかきうれひの袂の長き

くれなるの扇に惜しき涙なりき嗟峨あけのみじか夜曉寒かりし

朝を細き雨に小鼓こつづみおほひゆくだんだら染の袖ながき君

人にそひて今日京けふの子の歌をきく祇園清ぎをんきよみづ水春の山まろき

くれなるの襟にはさめる 舞まひあふぎ 扇 酔のすさびのあととめられな

桃われの前髪ゆへるくみ紐やときいろなるがことたらぬかな

浅黄地に扇ながしの 都みやこぞめ 染 九尺のしごき袖よりも長き

四条橋はしおしろいあつき舞姫のぬかささやかに撲つ夕あられ

さしかぎす小傘をかさに紅き揚羽あげは蝶てふ小褌とる手に雪ちりかかる



舞姫のかりね姿ようつくしき朝京きやうくだる春の川舟

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさねし襟なつかしき

舞ぎぬの袂に声をおほひけりこのみ闇の春の廻わたどの廊

まこと人を打たれむものかふりあげし袂このまま夜をなに舞はむ

三たび四たびおなじしらべの京の四季おとどの君をつらしと思ひ  
ぬ

あてびとの御膝みひざへおぞやおとしけり行幸源氏みゆきげんじの巻絵まきゑの小櫛をぐし

しろがねの舞の花櫛おもくしてかへす袂のままならぬかな

四とせまへ鼓うつ手にそそがせし涙のぬしに逢はれむ我か

おほつづみ抱かへかねたるその頃よ美き衣ぬきるをうれしと思ひし

われなれぬ千鳥なく夜の川かぜに鼓拍つづみびやうし子こをとりて行くまで

いもうとの琴には惜しきおぼろ夜よ京の子こひし鼓のひと手

よそほひし京の子すゑて絹きぬのべて絵の具とく夜を春の雨ふる

そのなさけ今日舞まひ姫ひめに強しひますか西の秀才すさいが眉よやつれし

## 春思

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯くぞ覚ゆる暮れて行く春

春みじかし何に不滅ふめつの命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ

夜よの室むろに絵の具かぎよる懸想けさうの子太古の神に春似たらずや

そのはてにのこるは何と問ふな説くな友よ歌あれ終つひの十字架

わかき子が胸の小琴の音ねを知るや旅ねの君よたまくらかさむ

松かげにまたも相見る君とわれゑにしの神をにくしとおぼすな

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩に有りとも思ふ

歌は君酔ひのすさびと墨ひかばさても消ゆべしさても消ぬべし

神よとはにわかきまどひのあやまちとこの子の悔ゆる歌ききます

な

湯あがりみかぜを御風めすなのわが上衣うはぎゑんじむらさき人うつくしき

さればとておもにうすぎぬかづきなれず春ゆるしませ中なかの小屏風

しら綾に鬢の香しみし夜着よぎの襟そむるに歌のなきにしもあらず

夕ぐれの霧のまがひもさとしなりき消えしともしび神うつくしき

もゆる口になにを含まむぬれといひし人のをゆびの血は涸れはて  
ぬ

人の子の恋をもとむる唇に毒ある蜜をわれぬらむ願ひ

ここに三とせ人の名を見ずその詩よまず過すはよわきよわき心な  
り

梅の溪の霽もやくれなるの朝すがた山うつくしき我れうつくしき

ぬしや誰れねぶの木かげの釣つりどこ床あみの網あみのめもるる水色のきぬ

歌に声のうつくしかりし旅人の行手の村の桃しろかれな

朝の雨につばさしめりし鶯を打たむの袖のさだすぎし君

御手づからの水にうがひしそれよ朝かりし紅べにふで筆歌かきてやまむ

春はるさむ寒さむのふた日を京の山ごもり梅にふさはぬわが髪かみの乱れ

歌筆を紅べににかりたる尖凍さきいてぬ西のみやこの春はるさむき朝

春の宵をちひさく撞つきて鐘かねを下りぬ二十七だん段堂だんのきざはし



手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子の恋われあやぶみぬ

病むわれにその子五つのをととなりつたなの笛をあはれと聞く夜  
とおもひてぬひし春着の袖うらにうらみの歌は書かさせますな

かくて果つる我世さびしと泣くは誰ぞしろ桔梗さく伽藍がらんのうらに

人とわれおなじ十九のおもかげをうつせし水よ石津川の流れ

卯の花を小傘をかさにそへて棲とりて五月雨わぶる村はづれかな

おほみあぶら  
大御油ひひなの殿とのにまゐらするわが前髪に桃の花ちる

夏花に多くの恋をゆるせしを神悔い泣くか枯野ふく風

道を云はず後を思はず名を問はずここに恋ひ恋ふ君と我と見る

魔に向ふつるぎの束つかをにぎるには細き五つの御指みゆびと吸ひぬ

消えむものか歌よむ人の夢とそはそは夢ならむさて消えむものか

恋と云はじそのまぼろしのあまき夢詩人しじんもありき画えだくみもあり  
き

君さけぶ道のひかりの遠をちを見ずやおなじ紅あけなる靄もやたちのぼる

かたちの子春の子血の子ほのほの子いまを自在はねの翅はねなからずや

ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひの神まどはしの神

うしや我れさむるさだめの夢を永久とはにさめなと祈る人の子におち  
ぬ

わかき子が髪のしづくの草に凝りて蝶とうまれしここ春の国

結けちぐわん願のゆふべの雨に花ぞ黒き五尺こちたき髪かるうなりぬ

罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながくつくられし我れ

そとぬけてその靄もやおちて人を見ず夕の鐘のかたへさびしき

春の小川うれしの夢に人遠き朝を絵の具の紅き流さむ

もろき虹の七いろ恋ふるちさき者よめでたからずや魔神まがみの翼つばさ

酔に泣くをとめに見ませ春の神男の舌のなにかするどき

その酒の濃きあぢはひを歌ふべき身なり君なり春のおもひ子

花にそむきダビデの歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思ふ

みかへりのそれはた更につらかりき闇におぼめく山吹垣根

ゆく水に柳に春ぞなつかしき思はれ人に外ならぬ我れ

その夜かの夜よわきためいきせまりし夜琴にかぞふる三とせは長  
き

きけな神恋はすみれの紫にゆふべの春の讚さんたん嘆のこゑ

病みませるうなじに織ほそきかひな捲きて熱にかわける御口みくちを吸はむ

天の川そひねの床のとばりごしに星のわかれをすかし見るかな

染めてよと君がみもとへおくりやりし扇かへらず風秋あきとなりぬ

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆかりを歎きつつ死なむ

うき身朝をはなれがたなの細ほそばしら柱 たまはる梅の歌ことたらぬ

さおぼさずや宵の火かげの長き歌かたみに詞あまり多かりき

その歌を誦ずします声にさめし朝なでよの櫛の人はづかしき

明日あすを思ひ明日の今おもひ宿の戸に倚る子やよわき梅暮れそめぬ

金色こんじきの翅はねあるわらは躑躅つづじくはへ小舟こぶねこぎくるうつくしき川

月こよひいたみの眉はてらさざるに琵琶ひばだく人の年とひますな

恋をわれもろしと知りぬ別れかねおさへし袂風たもとかぜの吹きし時

星の世のむくのしらぎぬかばかりに染めしは誰のとがとおぼすぞ

わかき子のこがれよりしは鑿みめうのほひ美妙みせうの御相みさうけふ身にしみぬ

清し高しきはいへさびし白銀しろがねのしろきほのほと人の集見しふし（酔



茗の君の詩集に)

雁かりよそよわがさびしきは南なりのこりの恋のよしなき朝あさ夕ゆふ

来し秋の何に似たるのわが命せましちひさし萩よ紫苑よ

柳あをき堤にいつか立つや我れ水はさばかり流とからず

幸さちおはせ羽やはらかき鳩とらへ罪ただしたる高き君たち

打ちますにしろがねの鞭うつくしき愚かよ泣くか名にうとき羊ひつじ

誰に似むのおもひ問はれし春ひねもすやは肌もゆる血のけに泣き  
ぬ

庫裏くりの藤に春ゆく宵のものぐるひ御経みきやうのいのちうつつをかしき

春の虹ねりのくけ紐たぐります羞はぢろひ神がみの暁あけのかをりよ

室むろの神に御肩みかたかけつつひれふしぬゑんじなればの宵の  
一ひとかさね襲ね

天あめの才さいここにほひの美しき春をゆふべに集しふゆるさずや

消えて凝りて石と成らむの白桔梗しろぎぎやう秋の野生のおひの趣味しゆみさて問ふな

歌の手に葡萄をぬすむ子の髪のやはらかいかな虹のあさあけ

そと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれさせつる十三絃よ



# 青空文庫情報

底本：「みだれ髪」新潮文庫、新潮社

2000（平成12）年1月1日発行

底本の親本：「みだれ髪」名著複刻全集 近代文学館、日本近代文学館

1968（昭和43）年12月発行

初出：「みだれ髪」東京新詩社・伊藤文友館

1901（明治34）年8月15日発行

※このファイルには、青空文庫からリンクされている以下のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「みだれ髪（明治34年）」（入力：岡島昭浩、大阪大学のサイト  
(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bungaku.htm>) で公開)

※初出の復刻版をもとにした底本は、本文では誤植もそのままなぞり、別に、監修者、松平盟子による訂正表を掲載しています。このファイルでは、同表において誤りとされた箇所をあらため、「[#「:」]は初出では「:」]」の形式で注記しました。

※底本編集時に、\*を添えて新たに付されたルビは、入力しませんでした。

※解説の便宜のために、底本編集時に加えられた通し番号は、入力しませんでした。

入力：田中哲郎

校正：富田倫生

2012年2月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# みだれ髪

与謝野晶子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>